

スプーンの話

小川 義博

本会報 62 号の小林会員「トランプの話」の中に「当時、海外旅行の記念に集めるものとしては、地名の入ったスプーンが定番でした。」という文章を目にしたとき、どこかにしまい忘れたスプーンが存在が気になった。それから 4 年、戸棚の片隅から重たい文明堂のカステラの木箱が出てきた。中には 50 年前の旅行の思い出すスプーンがうっすらとサビを見せて現れた。整理すると、国、都市、名所、そして自然、生物等がスプーンの柄の先にエナメルで描かれているものがあった。



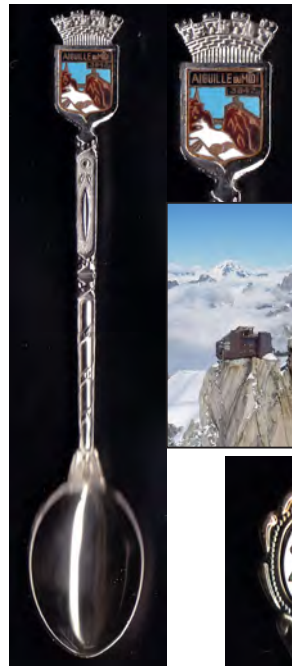
フランス、スコットランド、エジンバラのスプーン

右の 3 図は図柄部分の拡大図

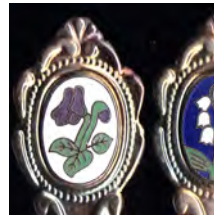


フランス領ポリネシアモーレア島
1958 年発行

ランドマークをつけたポリネシアモーレア島のスプーン



モンブラン山系の Aiguille du Midi の建造物をのせられた 3842m の山頂を描くスプーンとその写真



ノルウェーフィヨルドクルーズで購入した野花を描いたスプーン

他に比べ、工芸品を感じさせる。

これらのスプーン、画像からお判りのように、日用品としてはもちろん、日本ではとてもお土産の商品としても通用しない細工である。一部には金属部にバリが残っている始末、孫の玩具にも使用をためらうようなものである。どうか野草のスプーンが時にティースプーンとして使用できるか。若気の至り、ずいぶんくだらないもんに散財したもんだと悔やまれる。

このほかに、アムステルダム風車の回るもの、ゴンドラがゆれ動く物など手元にあるのが今となっては、恥ずかしいものがほとんどである。そんな中に口に入れる部分の裏側に模様を施したものがあつた。



スプーンの裏面を見るとチグハグ感を感じさせる

上のようなスプーンが舌に触れた時のなんともいえぬ違和感、装飾目的以外に何か目的があるのか。上部に目を向けると、のっぺりとした金属面のまま、日本であれば、バランスをとった細工を求められるのではないかと思った。ふと写真を見て、これに似た切手があったのを思い出した。英国の Coronation Spoon の切手だ。

他にスプーンの切手が無いか探してみると思ったよりも見つかった。



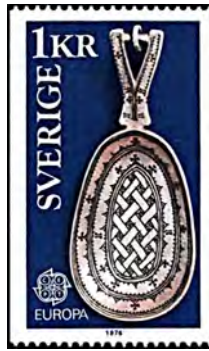
2011 年の発行
英国
Crown Jewels シリーズ 8 種の中の 1 種、下図 エリザベス女王戴冠式のスプーン



1953 年のエリザベス女王戴冠式のスプーン



斬新なスプーンのドイツ、デンマークの切手と
伝統工芸のスプーンのルーマニア切手



欧州郵便電気会議 (CEPT)1976 年切手のテーマ「手工芸品」で発行された 2 枚 スウェーデン「オオシカ角のスプーン」、ポルトガル「オリーブの木の木彫スプーン」

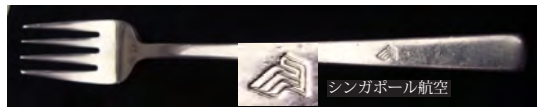
過去の散財を悔いながら散らばったスプーンを片付けていると、妻から「そんなスプーンより、生活に役立っている旅のおもいでのスプーンがあるんじゃない?」と言われた。「なに・・・?」と返すと、キッチンからジャラジャラ音をさせながら 10 本ほどのスプーン類を持ってきた。機内サービスのものをセルフサービスで誤って機内持ち込みバッグに落っことしたスプーン類であった。またも若気の至りを深く反省させられた。



アイスランド航空



ノースウエスト航空



シンガポール航空



英国航空

BRITISH AIRWAYS のものは毎朝のトーストのバター、ジャムぬりに非常に使いやすいという家族の評価である。これらスプーンをまとめて扱ってみて、あらためて機内食の食器類の重さを考えさせられた。エコと二酸化炭素排出の問題、一方、代替プラスチックはゴミ問題が存在、今後どのようなスプーンが利用されるのか見ていきたい。